

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

# Japanese translations of natural selection and the remnants of social Darwinism

著者	Kijima Taizo
出版者	法政大学国際日本学研究所
journal or publication title	国際日本学研究叢書
volume	22
page range	97-136
year	2015-02-17
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/10107">http://hdl.handle.net/10114/10107</a>

# natural selection の日本語訳と 社会ダーウィニズムの残留

木 島 泰 三

(翻訳：木島泰三)

タイトルの「社会ダーウィニズムの残留」とは、現代日本語の日常的な語法の中に暗黙裡に残留している社会ダーウィニズム的な発想、といったような意味である。具体的には、「淘汰」という語の用いられ方の中にそれが見いだされる、という指摘を行う。

周知のように、「(自然) 淘汰」はダーウィンの (natural) selection の日本語訳として、19 世紀から現在に至るまで使用されてきた。チエリ・オケ教授と筆者は昨年、この用語の日本語訳の導入や変遷に関する論文を発表したが<sup>1)</sup>、本論考では「淘汰」について、上述の観点から、より詳細な考察を行う。第 1 節では「淘汰」がダーウィンの selection の訳語として取り入れられた経緯と「淘汰」の原義を概観する。第 2 節では、国語辞典に「淘汰」のダーウィンの意味がいつ、いかにして記載されるようになったかを示し、かつ、その中に「社会ダーウィニズムの残留」が認められるという指摘を行う。第 3 節では現代の「淘汰」の用法の中にも、依然として社会ダーウィニズム的な発想が残っており、我々日本語使用者は現にそれを共有している、という点を明らかにする。

## 1. 「淘汰」に関する予備的な注記

### 1-1. natural selection が日本語に翻訳された経緯

最初に上記論文に即して<sup>2)</sup>、大まかな歴史的経緯を述べる。進化論導入の最初期とされる 1870 年代末から 1880 年代初期にかけては、色々な訳が試みられた時代であった。鈴木唯一による「自然淘汰」(1878 年)、井上哲治郎による「自然選択」(1878 年)、石川千代松らによる「天撰」(1879 年)、加藤弘之による「自然簡拔」(1879 年)、神津専三郎による「天然撰択」(1881 年)、などが挙げられる。しかし 1880 年頃には「自然淘汰」でほぼ統一され、その後終戦までこの訳語が一貫して用いられたようである。ところが終戦後、当用漢字表に「淘」も「汰」も載っていないことを理由に、『学術用語集』や高校教科書で「自然選択」が(再)導入、推奨され、この訳語は徐々に根付いて、70 年代半ば頃までには「自然淘汰」と半々程度になった<sup>3)</sup>。とはいえ「自然淘汰」も根強く

支持され、より最近では伝統的な「淘汰」が望ましいとする傾向が強まっているという<sup>4)</sup>。

## 1-2. 「淘汰」という語の原義と転義

上述の論文で紹介したように、多くの辞典によれば「淘」は「水で洗う」、「汰」は「水が濁る」で、「淘汰」の最も古い意味は、砂金などを水に浸して「選り分ける」という意味であるとされる。現在でも地学、鉱物学で用いられる「淘汰作用 [sorting]」という用語においてこの原義は生きている。

この原義から「選り分ける」行為一般を指す意味が派生した。このような「選り分け」の行為は「良いものを選び残す」ことでもあるし、「不要のものを洗い去る」ことでもあって、その両者を同時に行うというような意味になる。垂水はこの点に着眼し、「自然選択」よりも伝統的な「自然淘汰」の方がダーウィンの思想に適った優れた訳だ、という主張を行っている<sup>5)</sup>。ダーウィンは『種の起源』で「有利な変異が保存され、有害な変異が捨て去られることをさして、私は natural selection と呼ぶのである」(第4章)という定義を与えていて、「淘汰」なら「保存」も「捨てる」も両方意味できるが、「選択」ではその一方しか指せない、というのがその論拠である<sup>6)</sup>。

この指摘は妥当な指摘である。だが、現在では「淘汰」がほぼ「捨てる」方のみを指すようになっているのは一方で否定しようのない事実である。たしかに、名詞で「淘汰がなされる」「淘汰を受ける」などと言う場合、競争において勝者と敗者の振り分けがなされる、というような意味になり、両面を指すことが十分可能である。しかし動詞で「淘汰される」と言うと、これは「捨てられる」の意味にしかない。実際、農学の用語集を見ると、特に動物育種学で、「淘汰」は culling つまり不要な家畜を間引くという行為の訳語になっており、selection には「選抜」という訳語が当てられている。この用法は戦後確立したものとはいえ、戦前の育種学の教科書を見るとそのような意味は意識されていた。またかなり古い辞書や中国の現代語の辞書でも「淘汰」を「除く」「捨てる」という意味であるとしているものは多く見つかる<sup>7)</sup>。

## 2. 「淘汰」は単独でダーウィンの意味を担うことができる

### 2-1. 国語辞典の「淘汰」の項目にダーウィンの意味が掲載され始めたのはいつか？

「淘汰」と「選択」を辞書で比べたときに気づく、それ以外の大きな特徴は、現代の国語辞典ではほぼ例外なく、「淘汰」の語義の一部としてダーウィンの意味が記載されている、という点である。つまり「自然－」「人為－」「性(雌雄)－」ないし「頻度依存－」といった形容詞が前に来なくとも、「淘汰」はそれ自身でダーウィンのな selection の意味を担うことができる。一方の「選択」は意味が一般的に過ぎることもあつ

てか、こういう使い方はほとんどできない<sup>8)</sup>。

この点に関しても筆者らは上記論文で、『日本国語大辞典』と『広辞苑』という代表的な辞典での語義解説をその例として引いた (p.33)。再引用しておく。

① (「淘」も「汰」も水で洗う意) 洗ってより分けること。転じて、悪いものを除き良いものを選び出すこと。〔用例省略〕② (淘汰) 生物集団で、特定の形質をもつ個体群だけが特に繁殖するようになることで、適者が選ばれ、不適者は除かれる現象。ダーウィンはこれを人為淘汰・自然淘汰・雌雄淘汰に分けた<sup>9)</sup>。〔用例省略〕(『日本国語大辞典』、小学館、1972 年)

① 不用の物を除き去ること。不適當の者を排除すること。② (selection) 環境・条件などに適應するものが残存し、そうでないものが死滅する現象。選択。(『広辞苑』第 6 版、岩波書店、2008 年)

本論考では、これにいくつかの新情報を付け足したい。筆者は前述の論文の時点で、このような「淘汰」のダーウィンの語義が辞書に広く記載されるのは戦後以降らしい、ということに気づいていたが、それが具体的にいつからかは確認できていなかった。その後国会図書館で、デジタル化資料の「NDC 分類」に「日本語辞典」である「813」を入力して検索をかけ、終戦頃から始めて時期を前と後ろにたどる、という方法で調査を行ったところ<sup>10)</sup>、その初出は戦前、1938 年の、新村出編の『言苑』であるらしい、というさしあたりの結論を得た。

新村出は『広辞苑』の編者として高名な言語学者であり、それ以外にも多くの国語辞典の編纂を手掛けているので、筆者は新村が編纂した辞書の「淘汰」の項目を時系列順に追った。その結果、下記のような重要なパターンが見いだされた。これは現在の『広辞苑』のみから、あるいは単に『広辞苑』と『日本国語大辞典』のような現在の辞書を相互に比較するだけでは気づけなかったであろうパターンである<sup>11)</sup>。

洗ひ去ること。不用の物を去ること。(『辞苑』、博文館、1935 年)

① よいものを取り、不用の物を除くこと。② 生存競争の結果、不適當の者が排除されること。(『言苑』、博文社、1938 年)

① あらいすぐこと。② よいものを取って、不用のものをのぞき去ること。③ 生存競争の結果、不適なもののがほろびること。(『新辞泉』、清文堂書店、1954 年)<sup>12)</sup>

①あらいすぐこと。②不用の物を除き去ること。不適當の者を排除すること。③適者生存の理により、生物中、環境条件などに適應するものが残存し、そうでないものが死滅する現象。自然淘汰と人為淘汰とがある。〔『広辞苑』初版、1955年〕

①不用の物を除き去ること。不適當の者を排除すること。②(selection) 適者生存の理により、生物中、環境・条件などに適應するものが残存し、そうでないものが死滅する現象。自然淘汰と人為淘汰とがある。選択。〔『広辞苑』第2版、1969年；第3版、1983年〕

この後の第4版の改訂で、先に引いた第6版と同じになる（但し第6版では参照語彙が1つ追加される）。大きな変更点は、第4版以降では「適者生存の理により、生物中」が削除されることである<sup>13)</sup>。

ここに挙げた推移を見ていくと、これらの項目における「進化」のパターンが見いだされる。第1に、「洗い去ること」ないし「洗いすぐこと」という一番古い意味が記載されなくなる（『広辞苑』以前の辞書でも記載されたり記載されなかったりの揺れがあるが、『広辞苑』第2版で姿を消し、以後は復活しない）。第2に、「よいものを取り」のパートが消え、もっぱら「捨てる」方の意味が残されること（これは1938年の『言苑』で一度試みられ、『広辞苑』初版以降定着する）。そして第3に、ダーウィニ的な意味が1938年の『辞苑』以来収録されるようになる、ということである。

この3つの変化の意図はいかなるものであったと考えられるだろう。ここで注記すべきは、新村の『言苑』以前の辞書においては、「洗い流すこと」<sup>14)</sup> および「よいものを残すこと」という語義の掲載が一般的であった一方、ダーウィンの意味への言及は一切なかった、ということである<sup>15)</sup>。辞書とは一般的な傾向として語義に関しては保守的なものであることを考えると、新村ないし新村編の辞書の「淘汰」の執筆者は、上記の3点にアップデートの必要性を感じ、「洗い流す」「よいものを残す」は廃れた意味なので削除し、代わりに、すでに広く根付いていたダーウィニ的な意味を採用しようとした、という意図が推測できる。

この3つのアップデートのうち、1番広く、また1番早く広まったのは、3つ目のダーウィンの用法の収録だったようである<sup>16)</sup>。最初の2つは、今の辞書を見ても、『広辞苑』が提起したアップデートに倣っていないケースも多い。ここからして最低限言えそうなのは、「淘汰」のダーウィニ的な語義は戦前から、辞書に載せてもいいと国語学者が判断できる程度には広く定着していたと見ていいだろう、ということである。

## 2.2. 「淘汰」のほぼ廃れた用法について

上で引いた新村編の辞書における「淘汰」の項目からは、もう1点、より微妙な事情が読み取り得ると思われる。該当箇所を再度引いておく（重要箇所は下線で強調した）。

①よいものを取り、不用の物を除くこと。②生存競争の結果、不適當の者が排除せられること。」『言苑』1938年）

…②不用の物を除き去ること。不適當の者を排除すること。③…環境条件などに  
適応するものが残存し、そうでないものが死滅する…」（『広辞苑』初版、1955年）

下線部に注目すれば明らかであろうが、「不適當な者が／を、排除される／する」というほぼ同じ言い回しが、『言苑』ではダーウィンの語義の解説の中に登場していたのに、『広辞苑』になると「不用の物を除く」と並んで、より基本的な語義の一部として登場するようになる。もともと幾分ルーズだった「もの」と「物」と「者」の使い分け（前の方の辞書を一覧しても、必ずしも統一が取れていない）がより厳密になり、「不適當」という、自然科学的な語義解説に使うにはそれぞれ「不適當」な言葉が「不適」や「環境条件などに適応する（しない）」のようなより適当な表現に変わり、さらに、「自然淘汰」の記述としては幾分比喩的、擬人的とも見られる「排除せられる」が「死滅する」という「動作主」を予想しない言い方に変わるという変化も、この変化と関連しているように思われる。

この内の、『広辞苑』の第1の見出しの後半、すなわち「不適當の者を排除すること」という記載は、「淘汰」のある特定の用法、21世紀にはほぼ廃用といってよさそうだが、『広辞苑』出版当時には広く用いられていたように見える用法を捉えようとしたものと思われる（つまり現行の『広辞苑』はこの点でアップデートの必要があるかもしれない）。すなわちそれは、「不要の人員を削減、解雇する」ような意味で用いられる「淘汰」の用法であり、例えば『日本国語大辞典』で引かれている、漱石の『門』の「多数の噂に上った局員課員の淘汰」という用例と同様の用法である。他の同様の語義を含む表現として、「人員淘汰」「冗員淘汰」「老朽淘汰」といった言葉が戦前から1950年代頃までに書かれた辞書には見つかる（老朽淘汰とは老人を解雇する、ないし辞職、引退させることである）。言語学的な詳細な調査を経たわけではないが、現在このような「淘汰」の用法は一般的ではなく、例えば現在ならば「人員淘汰」の代わりに「人員整理」という語が用いられると思われる（あるいは、これも当用漢字表による漢字制限の余波であるかもしれない）。

第2に読み取れる重要な点は、このような「不適當な者を排除する」という語義が、

もともと『言苑』や他の辞書では「淘汰」のダーウィンの用法の一部として登場していた、ということである。ここから逆算できそうなのは、この「人員の排除」という語義こそ、そもそも辞書編纂者ないし執筆者が当初「淘汰」のダーウィンの用法を辞書に掲載するにあたり念頭に置いていた中心的な語義だったのではないか、ということである。「不適當」という自然科学の語義には不適當のように思える言葉の使用も、そのように考えると不自然ではない<sup>17)</sup>、そのとき念頭に置かれていたダーウィニズムなるものは、人間を優劣で容赦なく選別しふるい落とす、といった、いわゆる社会ダーウィニズム的な思想が特に念頭に置かれていた、と見るのがむしろ妥当なのではないかと思われれる。編者新村、または「淘汰」の筆者が辞書に収録する必要を感じたダーウィンの語義とは、単に狭義の生物学的な語義というよりも、そのような社会ダーウィニズム的な含みをもつ語義であったように推定できる。とはいえそのような語義は狭義の生物学的な現象を指す概念からの派生であるため、生物学的な概念の説明を記載した。そしてそのことがかえって上記のような事情を見えにくくした、ということではないかと思われる。

これは『言苑』の編者や該当箇所の筆者が社会ダーウィニストであったと主張したいのではなく、むしろ国語学者として、そのような社会ダーウィニズム的な語彙が定着している現状を、忠実に辞書に反映させようとしたのであろう、ということである。またこの推測が正しければ、「不適當な者を排除する」という意味での「淘汰」の用法は「洗い流す」や「精選する」という古典の意味から直接派生したのではなく、社会ダーウィニズム的な含みをもった言葉として広まったということになる<sup>18)</sup>。

それゆえ、「淘汰」の近代的な用法のまさに核心に「社会ダーウィニズムの残留」が位置していた、言うことも可能かもしれない。周知のように、1880年代の初めから20世紀初頭にかけて、加藤弘之らによる社会ダーウィニズムの影響力が非常に大きな時代があった<sup>19)</sup>。それ以降も、特に戦前は、社会ダーウィニズム的なダーウィニズムの理解やその人間社会への適用が広く見られた。表題の「社会ダーウィニズムの残留」で意図したのは、日常語に根付いた「淘汰」の語義の中に、このような歴史に由来する語義が、いわば化石化して残留しているのではないか、ということである。

「淘汰」のこのような社会ダーウィニズム的な語義の影響力は予想される以上に大きなものだったかもしれない。例えば我々は、「淘汰」が主に否定的な「除去、排除」の意味のみをもつようになったこと自体がその社会ダーウィニズム的な語法の流布と関連していたという可能性を考えてもいい<sup>20)</sup>。「淘汰」という漢籍に由来する古い言葉が現在のように一般的な言葉になっていることも、ダーウィン思想ないし社会ダーウィン思想の流通に負っているのかもしれない<sup>21)</sup>。例えば加藤弘之は『青松寺演説覚書』という未刊行の草稿で<sup>22)</sup>、natural selection に「自然簡拔」という訳語を与えている。仮にその後の『人權新説』などの書物でこちらの訳語が採用されていたら、その後の「淘汰」

および「簡拔」の語義や普及度がどう変わっていたか、と考えるのは興味深い<sup>23)</sup>。

### 3. 現在まで残留する「淘汰」の社会ダーウィニズム的語義

#### 3-1. ビジネスやマネジメントの雑誌を中心に広く用いられている「淘汰」

現在、「冗員淘汰」のような用法は廃用に近いであろう。とはいえ、これとは別の「社会ダーウィニズム的」なニュアンスを強く含んだ「淘汰」の用法は現在でも広く用いられている、という指摘を次に行いたい。

「MAGAZINEPLUS」<sup>24)</sup>、「ざっさくプラス」<sup>25)</sup>、「大宅壮一文庫雑誌記事索引検索 Web 版」<sup>26)</sup>、などの雑誌記事索引のデータベースで、表題に「淘汰」が入っている論文や雑誌記事を検索すると、生物学や鉱物学の論文よりもずっと多くの用例が『東洋経済』や『日経ビジネス』のような雑誌記事の中に見つかる<sup>27)</sup>。これらの記事に登場する「淘汰」は、見たところ相互にかなり似通った、独特の含みで用いられている。つまりそこでは、「淘汰」によって市場における「生存競争」とそこでの「生死」が比喩的に表現される。頻繁に見られるイディオムは「〇〇が淘汰の時代を迎える」というもので、この〇〇に、雑誌の特集ごとに「銀行」「コンピュータソフト業界」「自動車業界」「コンビニ業界」「カラオケボックス業界」等々が代入されるのである。

このような用例は実に多く、例えば、「ざっさくプラス」で一番ヒット数が多かった 1999 年で言うと、タイトルに『淘汰』を含む記事 178 件中、170 件までがこの用法であった<sup>28)</sup>。たしかに、この 170 件のほぼすべて (167 件) は週刊誌の短めの記事やコラムである一方<sup>29)</sup>、他方の 8 件は学術雑誌の論文で、単純に数だけの比較はできない。とはいえこれは、生物学の外で、「淘汰」が、「不適当の者を排除」とは幾分異なった含みの社会ダーウィニズム的な意味を担って広く流通している、という事実をはっきり告げるものだという点でやはり重要である<sup>30)</sup>。

この用法の「淘汰」の使用頻度には、一定のパターンが見いだせそうに思う。国会図書館の雑誌記事索引や「ざっさくプラス」などは、96 年代半ば以前の一般雑誌はデータベース化が進んでおらず、従ってデータの偏りが実際の状況を反映していないので難しいところもあるが、しかし 81 年以降のデータを収録している MAGAZINEPLUS によっても<sup>31)</sup>、1990 年代半ば頃までは、それほど使用例が多くない。しかし 97 年頃から飛躍的に用例が増え、1999 年から 2000 年ごろをピークに、その後もそれほど減少せずに現在に至る、というパターンを読み取ることができる。以下、『週刊東洋経済』『日経ビジネス』『経済界』という 3 つの雑誌の検索結果を表にまとめておく (なお、表題を見る限り、いずれの記事も上で挙げた独特の用法で用いられているとみてよい)<sup>32)</sup>。



年	『週刊東洋経済』	『日経ビジネス』	『経済界』
1981-1985	1	8	0
1986-1990	5	13	1
1991-1995	24	11	1
1996-2000	256	52	9
2001-2005	181	11	11
2006-2010	177	6	1
2011-	11	2	1

即断は避けるべきであるにしても<sup>33)</sup>、このパターンはいわゆるバブル経済の崩壊とその後の様々な形態での「ネオリベラリズム」的な政策や思想の台頭と相関しているように思われる。ここでの「淘汰」がほぼ常に市場での競争か、それ以外でもそれに準じる競争（政界での「淘汰」など）に関連して語られている、ということがそれと関連しそうだという推測は自然に引き出されそうである。

このような用例での「淘汰」を表題に掲げた本もいくつか出版されており、そこにはこのような「淘汰」の意味合いや用いられる文脈への解説が述べられており、興味深い。ここでは2つの例を挙げる<sup>34)</sup>。

1つ目は喜多村和之編『学校淘汰の研究——大学「不死」幻想の終焉』（東信堂、1989年）、喜多村和之著『大学淘汰の時代——消費社会の高等教育』（中公新書、1990年）である。この内の前者の序において編者喜多村は、なぜ「学校淘汰」や「大学淘汰」という用語を用いるのかを解説しており、そこには現在の関心からすると有益な叙述が含まれる<sup>35)</sup>。そこで喜多村はまず、我々も上で引用した『広辞苑』と『日本国語大辞典』の「淘汰」の項目を引き、少なくとも『日本国語大辞典』では「淘汰」が「悪いものを除く」だけでなく「良いものを選び出す」の意味ももつことを確認し、それゆえに「教育機関の新設・廃止・統合・合併等の変化現象の過程やメカニズムを包括するのに適当」であると考えたことを述べる。さらに喜多村は2つの辞書がいずれも、「淘汰」にダーウィンの(natural) selectionの意味があるとしていることに触れ、「既成の教育機関のうち、あるものは発展し存続していくがあるものは衰退し消滅していく過程」の「生死を分ける選択のメカニズム」を「淘汰」という語で表そうとした、と述べている（『学校淘汰の研究』pp.7-8）<sup>36)</sup>。

もう1つはより最近の、川日正良著、『生き残る病院、淘汰される病院』（すばる舎リネージュ、2008年）である。これは学究的、反省的な喜多村の著書に比較するとより通

俗的なスタンスで書かれているが、それだけに「淘汰」という用語のこのような用法の生きた事例として興味深い。例えば、同書で川目は、これまで市場原理の埒外に置かれてきた病院が間もなく市場原理にさらされることになるであろう、という予測を行うのだが、そこで市場を「自然淘汰の摂理」が働く場所として述べており、市場原理を指す「淘汰」がダーウィンの意味で用いられていることが明確に示されている (p.2) <sup>37)</sup>。

以上の事例において示された含意は、現代広く用いられている、同様の文脈での「淘汰」全般に広く当てはめていいように思われる。つまり、何らかの社会的な領域（産業のみならず、教育、医療、等々）が今後普遍的にさらされるであろう市場原理を「淘汰」と呼ぶとき、そこでは、喜多村が辞書の用例を引いて明示し、また川目が「自然淘汰」という言い換えをして示したように、その「淘汰」はダーウィンの（と思われる）過程を指している、ということである。

### 3.2. 「社会ダーウィニズムの残留」という表題のより詳しい意味

ここまでの議論で、筆者は「社会ダーウィニズムの残留」という呼称の下にいくつかの事例を紹介してきたが、ここでこの呼称に込めた意図を明確化し、あり得る混乱や誤解を取り除いておきたい。

まず確認したいのは、上で挙げた2人の著者や、その他現代、「淘汰」の同様の用例に訴える人々が、自らを「社会ダーウィニスト」と名乗っているわけではないし、恐らく、自らそう名乗る著者はいないとも思われる、という点である <sup>38)</sup>。指摘しようとした論点はむしろ、「社会ダーウィニズム的」な意味合いが「淘汰」という語そのもののの中に組み込まれていて、上で挙げたような言説を提起する著者や記者のみならず、日本語の使用者の大半がそれほど気にかけずにそのような意味を共有し、使用している、ということである。つまり筆者は1つの文化的、言語的事実としての「社会ダーウィニズムの残留」を指摘しようとした。これが第1の点である。

第2に、筆者が用いた「社会ダーウィニズム」という呼称は、特定の時代に存在した一定の思想を特に指しているのであって、ダーウィンのアイデアを人間や社会に適用しようという試み一般を指すのではない、ということである。近年、狭義の生物学の垣根を越えてダーウィンのアイデアを様々な事象に適用する試みが盛んになされている。進化心理学、行動経済学 <sup>39)</sup>、文化進化のミーム説 <sup>40)</sup>、宗教の進化論的研究 <sup>41)</sup>、等々がその例である <sup>42)</sup>。ダーウィン自身、そのアイデアをマルサスの著作から、いわば学際的な手法で獲得したということをここで想起してもよい <sup>43)</sup>。おおむね1980年代以降のこうしたダーウィニズムの拡張の試みは、それが経験的裏付けを欠くイデオロギーに堕してしまう危険性に十分自覚的でありさえすれば、豊穰かつ有望な研究プロジェクトであると筆者は考えている。

筆者が「社会ダーウィニズム」という名で名指した特定の時代の特定の思想とは、その種の思弁的イデオロギーに堕した思想である。垂水はその近著『科学はなぜ誤解されるか』で、主に欧米の社会ダーウィニズムを取り上げながら、ボウラーのまともに沿った仕方、この点に関する有益な特徴づけを行っている<sup>44)</sup>。それによれば、いわゆる「社会ダーウィニズム」として括られているスペンサー思想は、前ダーウィンの「変遷説」の人間社会への適用版に過ぎない<sup>45)</sup>。それは「進化」と直線的で絶対的で内発的な「進歩」を等号で結び（この点で「社会ダーウィニズム」というよりは「社会ラマルキズム」という呼称が適切であるという）、「弱肉強食」の過程がその「進歩」を先に進めるのだ、とでもいうような主張を訴える思想であって、これは「環境により適したものがより多くの子孫を残すというダーウィンの穏やかな思想」とはかけはなれた思想である、とされる（pp.139-147）。筆者がこれを受けて述べたいのは、上で述べたように、「淘汰」の語義の中には、加藤弘之の時代以来埋め込まれてきた「社会ダーウィニズム」が今も根付いているのではないか、ということである。

上で述べた2人の著者に関して言えそうなのは、いずれも「淘汰」という語を、近年のダーウィニズムの拡張という潮流とつながる視座からではなく、むしろ語に組み込まれ、化石化した加藤弘之の時代のダーウィニズム理解につながるような意味合いで用いているように思われる、ということである。

喜多村の研究はより穏当で学究的な観点からなされており、このアプローチを現代のダーウィンのアプローチと統合することあるいは可能かもしれない。しかしながら、喜多村自身は自分の研究を現代の進化論的アプローチ（80年代末にはすでに存在し始めていた）と結びつけてはおらず、むしろ国語辞典の語義に、つまりは我々が、社会ダーウィニズムの残留ないし化石化を指摘したソースに結びつけている<sup>46)</sup>。

他方の川目は、より素朴にそうした「化石化した」意義に依拠した立論を行っているように見える。そこで図らずも「自然淘汰の摂理」なる表現が登場しているのは特に示唆的である。「摂理」=プロヴィデンスとは、単なる「法則」や「原理」以上の神学的なニュアンスを暗黙裏に含む。敢えて言えばそこで「自然淘汰」=競争原理は一種の擬似宗教的な概念として用いられているとも見られる。そこに垣間見えるのは、つまり、「淘汰」の試練を乗り越えると、何か良いことが、つまり何か絶対的な進歩が訪れるはずだ、とでもいうような信仰である<sup>47)</sup>。

第3に行いたい注記は、筆者は以上の概観を根拠に、生物学や日常語から「自然淘汰」という用語を追放し、既存の代案としての「自然選択」を採用しようという提案を行うものではない、ということである。たしかに、データベースに当たる限り、「自然選択」はほとんどすべて生物学やその関連する学問分野の範囲内で用いられており、従って「自然淘汰」が含む錯綜したニュアンスに当たるものを抱え込んではいない。しかしこのこ

とのみをもって「自然淘汰」に代えて「自然選択」を推奨する強い理由とすることは難しいのではないかと考える。少なくとも言えるのは、その種の単なる言い換えには、日常的な意識に化石化して根付いているダーウィニズムに関わる偏ったイメージを覆す力は期待できない、ということであり、そのような力を期待しうるとしたら、それはむしろ広範囲にわたって用いられている「淘汰」の方ではないかとも思われるのである。

## 結びに代えて——「受容と抵抗」について

当シンポジウムの提題である「受容と抵抗」は、「淘汰」がたどってきた道とも重なる。まず「淘汰」という旧来の漢語の、新概念——つまりスペンサー主義と絡まり合って導入されたダーウィン思想——への転用が、1つの「受容と抵抗」の形だった。進駐軍の政策に由来する漢字政策がもたらした「自然選択」への「自然淘汰」による「抵抗」という物語もあるいは描きうるかもしれない。そしてより重要なのは、現代の「自然淘汰」という語の立ち位置を理解するのに不可欠な「外圧」が少なくとも2つある、という点である。1つは70年代末から80年代にかけて進んだネオダーウィニズムの大規模な導入と、それによる今西進化論や徳田御稔のルイセンコ主義（に元々は由来する）進化論が「淘汰された」という歴史である。もう1つは、詳しくは今後の課題であるが、現在のビジネス誌にこれほど多く「淘汰」が出てくる背景として考えられる、いわゆるネオリベラリズムの思想や政策の影響である。

これらの変化は単に日本対西洋という図式を越えて、世界規模での様々な変化の一部としても捉えうる。例えば、フランスではラマルキズムが日本での今西進化論のような仕方ではダーウィニズムの大規模な導入を阻んでいたらしいという研究があるし<sup>48)</sup>、垂水の指摘するように、欧米でのドーキンスの流行と経済学におけるネオリベラリズムの台頭は時期を同じくしているということからして（『科学はなぜ誤解されるか』p.9）、2つの「外圧」がどこかで微妙な絡まり合いをしているという推定も可能である。それゆえに、我々は現在もなお進行中の「受容と抵抗」と呼べる何かに加わっているのではないかと、という認識も可能であるかもしれない。

## 註

- 1) Taizo Kijima & Thierry Hoquet, "Translating "natural selection" in Japanese: from "shizen tōta" to "shizen sentaku", and back?", in *Bionomina*: 6, 2013, pp.26-48. <<http://dx.doi.org/10.11646/bionomina.6.1.2>>
- 2) Kijima & Hoquet 2013のセクション3.1-3.2、特に表2を参照。なおこの表2は磯野直秀「進化論の日本への導入」（守屋毅編『モースと日本——共同研究』、小学館、1988年、pp.245-394）所収の表を基にしている。

- 3) 八杉竜一訳の岩波文庫の『種の起原』の出版が1963年～1971年で、そこで「自然選択」が用いられていたのが「自然選択」の普及の一要因であった可能性がある。八杉は高校の教科書での「自然淘汰」の使用にこだわっていた教科書執筆者でもあり、これは1つの歴史の皮肉であるかもしれない。
- 4) cf. 垂水雄二『悩ましい翻訳語——科学用語の由来と誤訳』八坂書房、2009年、pp. 98-100.
- 5) 垂水雄二『悩ましい翻訳語』、前掲箇所参照。
- 6) オケによればダーウィンの selection は当時の育種家の間で「育種」を指すために用いられていた言葉で、単純に「選ぶ」や「選択」と訳すのでは不十分だと当時ドイツなどでは考えられていた。これも「自然選択」という単純な直訳への異議になりうるかもしれない。Thierry Hoquet, "Translating natural selection: true concept, but false term?", in *Bionomina*: 3, 2011, pp.1-23 (p.7). <<http://dx.doi.org/10.11646/bionomina.3.1.1>>.
- 7) 現代の中英辞典では次のように解説されている、"(1) eliminate through selection / competition; (2) die out" (John DeFrancis et al. (ed.) *ABC Chinese-English dictionary: alphabetically based computerized*, University of Hawai'i Press, 1996, p.586.)
- 8) 生物学の文献で、selection pressure を「選択圧」と訳したり、前後の文脈からダーウィンの selection が明らかである場合にただ「選択」とだけ書くような事例はありうるが、一般的な用法とは言にくい。
- 9) 「個体群」は、一般には population の訳語として用いられており、この解説中でいうと「生物集団」に相当する概念を表す。現在の記載だと population それ自体が自然淘汰の単位になるようにも読めてしまうので、この点は見直しの余地があるかもしれない。
- 10) 国立国会図書館デジタルコレクション <<http://dl.ndl.go.jp/>>
- 11) 省略したが、この後「淘汰法」や「淘汰盤」（いずれも地学や鉱物学の用語や道具）のような派生語が続く場合があり、これらによって「水で洗う」の削除を埋める意図があった可能性もある。
- 12) 『新辞林』（清文堂書店、1953年）と『国語博辞典』（甲鳥書林、1957年）はほぼ同じ記述内容で、ただ、「不適なものがあること」の箇所が「不適当のものが排除されること」（『新辞林』）および「不適当のものが除き去られること」（『国語博辞典』）という、『辞苑』と同じかそれに近い形態のままである点が異なる。
- 13) 元来「(最) 適者生存」(survival of the fittest) は「自然淘汰 (自然選択)」の同義語であり、従ってそれが定義に用いられると同語反復が生じる恐れがあるので、この削除は理に適っていると思われる。
- 14) 『日本国語大辞典』には『唐詩選国字解』（1791年）からの引用で、「淘汰は金と云ふものは砂の中に混じってあるを水にひたしてえりわけておいて、そうして真金にすることぢや」という用例が載っている。これを見ると、江戸期にはすでに「洗う」の意味は廃れていたのではないかと、とも思われる。他に、磯野直秀作成の1870-80年代の進化論関係の訳語リスト（注2）参照）を見ると、最初期には「淘汰」について「淘汰」「淘汰」「淘汰」といった誤記が頻出しており、とりわけ「さんずい」の欠落が目立つ。これは「洗う」という原義が意識されていなかったことを示すとも考えられよう（但し無論、単なる植字技術の未熟さの可能性もある）。
- 15) 1938年以前にも『大日本国語辞典』（富山房、1928年）や『日本大辞典 言泉』（大倉書店、1929年）などの「自然淘汰（説）」の項目には非常に詳細な解説が載っている。しかしこれらの辞書も「淘汰」の項目にはダーウィンの語義を載せていない。
- 16) これ以外に注目すべきは、1950年代に急激に増加した、「淘汰」の項目に載るダーウィンの語義の記述に、最も古い『言苑』の「生存競争の結果、不適当の者が排除されること」をそのまま写したとしか思えないものが非常に多い、ということである。1951年に2件、1952年に2件、1953年に1件、1954年に3件、この種の「ほぼ引き写し」が出版社も編者も違う辞書で見つかった。現代に目を転じて、『新明解国語辞典』第6版（2005年）の「生存競争の結果、環境に適応できないものが減びること」という記述などは、「不適当」はもちろん、多くの改訂の跡が見られるとしても、もとは『言苑』と同

じ記述だったことが伺われる記述である。

- 17) 筆者は当初、「不適當」が今の言語感覚よりも価値中立的な、「適応していない」や「場にはまっていない」のような意味合いで使われていた可能性もあるのではないかと考えた。しかし後の『広辞苑』の記述から逆算する限り、やはり価値評価を含むような言葉であろうと思われる。
- 18) もし仮に、「不適當の者を排除する」が「淘汰」のダーウィニ的な用法よりも古くからあったとすると、ダーウィンの概念には当初から社会、人間に関わる含みをもった訳語があてられていたということになる。
- 19) 日本における社会ダーウィニズムの盛衰に関しては、例えば以下を参照——Julia Adeney Thomas, *Reconfiguring Modernity: Concepts of Nature in Japanese Political Ideology*. University of California Press, 2002 (ジュリア・アデニー・トーマス著、杉田米行訳『近代の再構築——日本政治イデオロギーにおける自然の概念』、法政大学出版局、2008年)。
- 20) 垂水雄二氏がEメール上でこのような可能性を示唆されていた。
- 21) 社会ダーウィニズム的では全くないが、しかし「淘汰」とダーウィンの思想との強い結びつきを示唆する意外な事例として、地学団体研究会編『新版地学事典』(平凡社、1996年)の下記のような事典の項目がある。

とうたさよう 淘汰作用 sorting (独)Sortierung (仏)classement, granulometrique (露)сортировка

不均一あるいは不均質な個体の集りからなる一群の集団から、ほぼ均一あるいは均質な個体からなる一つまたはそれ以上の部分的集団が選出される、あるいはいくつかの部分的集団が形成されること。生物進化論においては、この作用が自然の諸条件のもとで行われるとき自然淘汰 (natural selection)、人間の管理のもとで行われるとき人為淘汰 (artificial selection) という。堆積学においては、雑多な起原をもち、不均一な集団である原材料から、運搬の過程を通じて、粒子の種類・粒度・形状・比重などに応じた分別と集積が行われる現象を淘汰という。粒度に応じた淘汰を特に分級作用または篩〔し〕別 (ふるい分け) 作用といい、その程度を数学的に表現する方法も考案されている。〔山下昇〕

地学の sorting と生物学の selection をこのように結びつけて論じるのは一般的ではないように見受けられるが、これは「淘汰」のダーウィンの語義がいかに根強く広まっているかの1例となり得るだろう。

- 22) この草稿は次の書物に再録されている。吉田曠二、『加藤弘之の研究』、大原新生社、1976年、pp.268-325。
- 23) 「簡拔」は普及度の点で「淘汰」よりもずっと低いと思われる。現在、材木の間引きを指すために用いられ、「簡拔材」という語としてある程度流通しているが、「間拔(材)」や「間伐(材)」という表記も多く見かける。なお、個体の密度を減らすための「間引き (thinning)」は、品種改良のための人為淘汰 (人為選択、人為選抜、artificial selection) と同義ではない。
- 24) <<http://www.nichigai.co.jp/database/magplus.html>>
- 25) <<http://zassaku-plus.com>>
- 26) <<https://www.oya-bunko.com/>>
- 27) なお、いずれも法政大学図書館を通じてログインし、利用した。
- 28) 残り8件の内、「淘汰」について狭義のダーウィンの淘汰を指していると見られる記事としては、生物学、農学、それに人工生命シミュレーションを扱った数学論文など。その他、歴史学関連で、「冗員淘汰」「老朽淘汰」という用語がタイトルに入っているものがあり、ビジネス誌の用例とは違うということで除外した。なお、1999年のレコードには入っていなかったが、「淘汰」で検索してヒットする論文として、これ地学関係の論文で「淘汰」を用いているものが一定数ある。先述のように、これはダーウィンの用法以前の「淘汰」の語義を残した用例である。

- 29) 残り3件は『学校経営研究』という学術誌掲載の論文であり、後述の「学校淘汰」研究の事例と見られる。
- 30) 但し、検索によると1916年(大正時代)に書かれた「金融界ニ於ケル自然淘汰」という論文があり、この用例がことさらに新しい、という主張はできない(Ellis T. Powell 著、十亀盛次「金融界ニ於ケル自然淘汰」、『経済学商業学国民経済雑誌』、1916年、「ごっさくプラス」による6月24日の検索結果)。
- 31) この検索結果は2014年6月24日に再検索したもの。但し、報告時に利用した検索結果との本質的な異同はなかったと思う。
- 32) 限定された範囲ではあるが、よりさかのぼったデータを入手できるデータベースとして、日経ビジネス出版が作成した「日経BP記事検索サービス」があり(<<http://bizboard.nikkeibp.co.jp/daigaku/>> 法政大学図書館よりログインして使用)、同社刊行の雑誌記事を1970年代までさかのぼって検索できる(筆者は法政大学図書館経由で6月中旬から下旬にかけて何度か検索を行った)。それによって『日経ビジネス』誌の1980年以前の検索を行ったところ、表題に「淘汰」を含む記事は1975年と1976年に1度ずつであった。
- 33) 例えば漢字制限の影響力は年々低下しているように思われ、それが「淘汰」の増加に影響しているという可能性もある。
- 34) その他の類書に、児玉邦二『幼稚園淘汰の研究』(東信堂、1998年)がある。同書あとがきを見ると、著者は下記の喜多村の研究に触発されて本書をまとめたという経緯が書かれている。
- 35) 喜多村は『学校淘汰の研究』のあとがきで、「学校淘汰」や「大学淘汰」という用語の先例として新堀通也の名を挙げている(p.327)。しかし現在のところ筆者は新堀の用例を探し出せていない。
- 36) 以下引用する。

本研究で「淘汰」というコトバを用いたのは、これが教育機関の新設・廃止・統合・合併等の変化現象の過程やメカニズムを包括するのに適当な用語と考えたからに他ならない。…〔中略(辞書の引用と第一義の解説)〕…。

第二義としてはいずれの辞書も「選択」(selection)と同義とし…〔以下辞書の引用〕…いずれもダーウィンの適者生存による自然淘汰・人為淘汰の意味を用いている。

以上の語義を我々の研究テーマにあてはめるならば、学校淘汰とは教育機関が新設されたたり廃止されたたりする動態を示し、とりわけ既成の教育機関のうち、あるものは発展し存続していくが、あるものは衰退し消滅していく過程であり、既成の教育機関としての組織体としての生死を分ける選択のメカニズムの解明を志しているわれわれにとって、まさにこうした現象を包括的に含意する用語と考えたのである。

ところで、学校や大学の淘汰現象とは、具体的にはどのようなことを意味するのであろうか。ここで本書で使用する「淘汰」とは、教育機関が設立後、なんらかの理由ないし条件のもとで、あるものは存続し、あるものは消滅していくという選択(selection)現象を、進化論の用語を借りて表現したものである。具体的には、教育機関の新設、増設、統合、合併、移行、廃止などの現象を歴史的、社会的なコンテクストにおいて包括した意味で用いている。(pp.7-8)

- 37) 以下引用する。

病床削減や診療報酬・薬価カットが断行されることは、医療サービスの市場規模が縮小されることを意味する。マーケットボリュームが小さくなれば、そこには自然淘汰の摂理が働く。「生き残る病院」と「淘汰される病院」とが色分けされながら、医療サービス市場における需要と供給のバランスが保たれていくのである。

病院が市場で生き残るには、他の病院との明確な差異化が必要である。もはや病院は、はっきりと自院の強みを確立し、その優位性を訴えなければ、行政や患者に選ばれな

い時代になったのである。

振り返れば、バブル経済崩壊以降、金融機関など、護送船団方式で守られていた日本企業の多くは、一瞬にしてその保護を解かれ、地球規模の競争原理のまっただ中に放り込まれた。そこで、自浄努力によって顧客満足度を高めるサービスを積極的に開発し、提供した企業は生き残り、イノベーションを怠った企業は、倒産や買収の憂き目に遭った。

今まさに、病院もこうした転換期を迎えている。生き残るために医療サービスを刷新するか、さもなければ市場から退出するか、経営者は選択を迫られているのである。(p.2)

- 38) シンポジウム後、筆者にこの点の曖昧さを指摘して下さったポール・ドゥムシエル教授に感謝申し上げます。
- 39) George Ainslie, *Breakdown of Will*. Cambridge University Press, 2001. (ジョージ・エイズリー著、山形浩生訳『誘惑される意志——人はなぜ自滅的行動をとるのか』NTT出版、2006年) など。
- 40) この概念はドーキンス『利己的な遺伝子』(初版) 最終章で最初に導入された。*The Selfish Gene*. Oxford University Press, 1976 (日高敏隆、岸由二、羽田節子訳『生物＝生存機械論——利己主義と利他主義の生物学』紀伊國屋書店、1980年。1991年に原著増補章を追加し『利己的な遺伝子』と改題)。
- 41) Pascal Boyer, *Religion Explained: the evolutionary origins of religious thought*. Basic Books, 2001 (パスカール・ボイヤー著、鈴木光太郎・中村潔訳『神はなぜいるのか』NTT出版、2008年) ; Daniel C. Dennett, *Breaking the Spell: religion as a natural phenomenon*. Viking, 2006 (ダニエル・C・デネット著、阿部文彦訳『解明される宗教——進化論的アプローチ』青土社、2010年) など。
- 42) この種の進化論的研究の興隆に至るターニングポイントとなったのは、ウィルソンの『社会生物学』の刊行である。E. O. Wilson, *Sociobiology: the new synthesis*. (Belknap Press of Harvard University Press, 1975, エドワード・O・ウィルソン著、伊藤藤昭他訳『社会生物学』思索社1983-1985年)。その後のいわゆる「社会生物学論争」の詳細な研究は次の書物などを参照。Ullica Segerstråle, *Defenders of the truth: the battle for science in the sociobiology debate and beyond*. Oxford University Press, 2000 (ウリカ・セーゲルストローレ著、垂水雄二訳『社会生物学論争——誰もが真理を擁護していた (1, 2)』みすず書房、2005年)。
- 43) シンポジウムの質疑においてこの点に関わる指摘を下されたチェリ・オケ教授に感謝申し上げます。
- 44) 垂水雄二『科学はなぜ誤解されるのか——わかりにくさの理由を探る』平凡社新書、2014年
- 45) ピーター・J・ボウラー『ダーウィン革命の神話』松永秀夫訳、朝日新聞社、1992年 (Peter Bowler, *The Non-Darwinian Revolution: Reinterpreting a Historical Myth*, Johns Hopkins University Press, 1992) にこの点のより詳しい解説がある。
- 46) 川目がもっぱら「排除」の意味で「淘汰」を用いているのに対し、喜多村は「選び取る」と「ふるい落とす」の双方の意味を「淘汰」がもつことに注目している、というのは注目すべき相違点であろう。但し喜多村にも、以下のような「淘汰」の用例は見いだされる——「学校の「淘汰」の分析にとどまらず、学校や大学の「生き残り」の戦略に役立つと共に教育機関の質の向上と活力(バイタリティ)の発揮を促す一助となることがあるならば」(『学校淘汰の研究』、p.328)。
- 47) ルボライター鈴木傾城のブログの記事で、反TPPの観点から現代の競争社会を批判する文章があり、その中に、以下のような、進歩信仰についての簡を得た批判的要約が登場する。

競争原理を支えてきた考え方はこうだ。



- (1) 競争によってお互いが切磋琢磨される。
- (2) すぐれた物（人）が生き残る。
- (3) すぐれた物（人）で社会は発展してゆく。

これは、環境に合わせて生き残ってきたダーウィンの進化論の考え方にも似ていて、非常に心地よい。いわゆる「適者生存」という思想だ。<[http://www.bblackz.com/2013/10/blog-post\\_14.html](http://www.bblackz.com/2013/10/blog-post_14.html)>

引用したのは、要約として分かりやすいという以外に、この種の進歩信仰をまさに「ダーウィンの進化論」と結びつける発想が、残念な仕方現代の通念を代表しているとも思われたからである。

- 48) cf. Ernest Boesiger, "Evolutionary Biology in France at the Time of the Evolutionary Synthesis", in Ernst Mayr and William B. Provine (eds.), *The Evolutionary Synthesis: Perspectives on the Unification of Biology*, Harvard University Press, 1980, pp.321. 但し、ジャン・ガイヨン教授との談話によると、この報告の記述は必ずしも正確ではない可能性がある。